

# Peshawar-kai

# ペシャワール会報

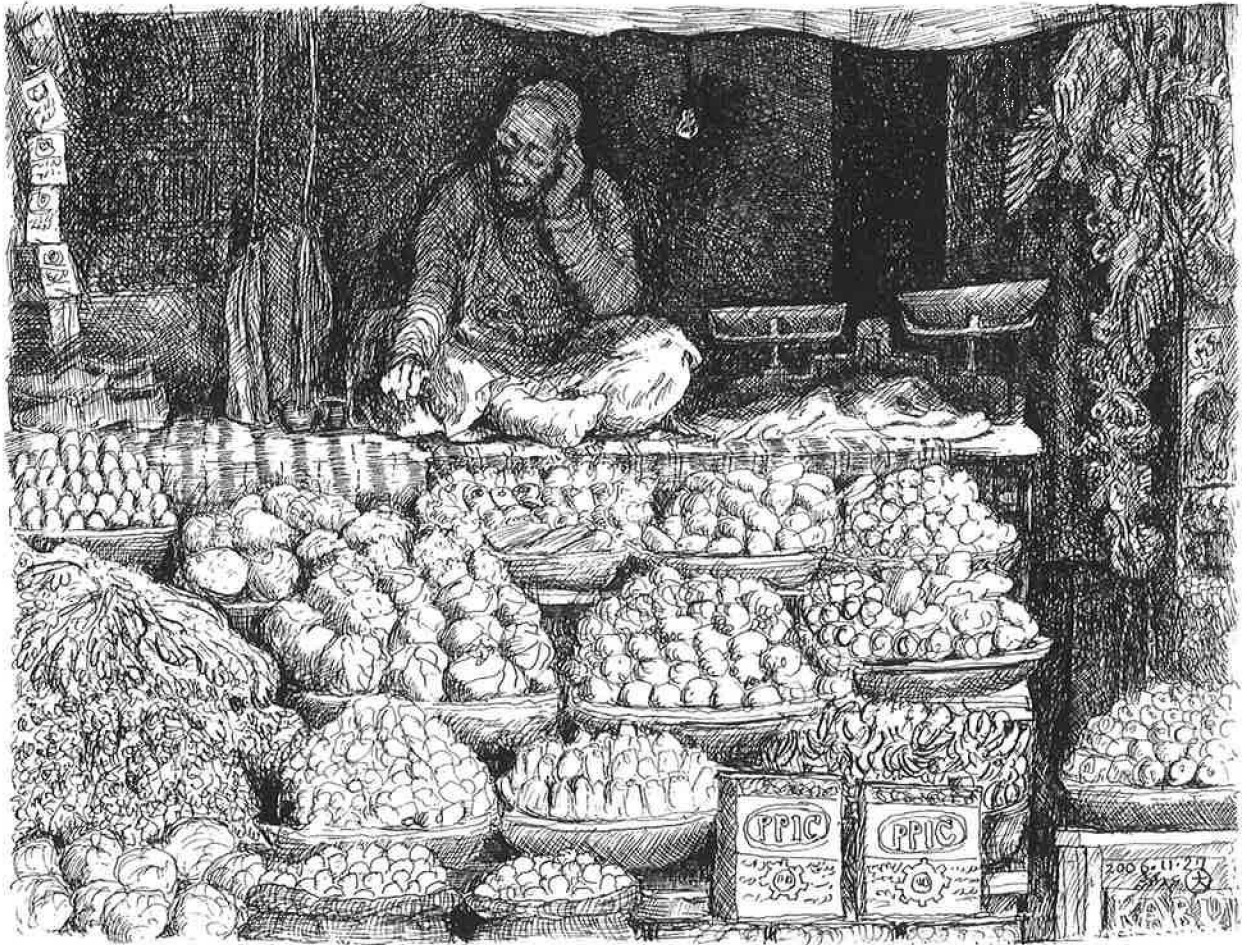
ペシャワール会事務局  
〒810-0041 福岡市中央区大名  
1-10-25 上村第2ビル603号室  
TEL 092 (731) 2372  
FAX 092 (731) 2373

## No.90

2006年12月6日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 [peshawar@kkh.biglobe.ne.jp](mailto:peshawar@kkh.biglobe.ne.jp)



表紙絵 野菜屋の午睡 (画・甲斐大策)

用水路建設は命運を賭けた最終局面へ	中村 哲
四年ぶりの「挑戦」	蓮岡 修
子供たちの笑顔に難工事完遂を決意	木藪健児
充実感と無力感のはざままで	竹内英允
サツマイモとお茶の加工法を研究しています	伊藤和也
自分を犠牲にしても助け合うスタッフの姿に感動	河本定子
ワーカーOB報告②実践と継続の大切さを学んだ日々	目黒 丞
「ダ NGO カールディ (これこそがNGOの仕事だ)」	米原ユリ

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

# 用水路建設は命運を賭けた最終局面へ

## ——今冬の作付けを決する緊急送水に目途——

PM S (ベシャワール会医療サービス) 総院長

中村 哲

### 過去最低の水位

お元気でしうか。

今、アフガニスタン全体で深刻な早魃かんぼうが一般化していることは、度々訴えてきました。それが、更に悪化し続けている事実はあまり知られていません。私たちの用水路があるクナール河でも、晩秋から過去最低の水位を記録しました。

農民たちは不安に脅えています。取水口の底よりも川の水位が下がると、当然水が入ってきません。このため、クナール河沿いの他の地域では、既に一〇月、稲の熟成期に必要な水がなく、多くの地域でコメやトウモロコシの収穫ができませんでした。その上、間もなく主食である小麦の作付け期にさしかかっています。川の水位は、通年よりも約一メートル下降、膨大な畑が渇水で春の収穫を期待

できなくなります。

私たちの「真珠川」用水路のやや下流に、数百年間、広大な農地を潤してきた古い水路が二つあります。シェイワ用水路、シギ用水路と呼ばれ、ニングラハル州北部で併せて約一万町歩（二万ヘクタール）、早魃のさなかにあっても安定した穀倉地帯を成してきました。そこが壊滅の危機に瀕しているというのですから、相当危うい状態です。

この中であって、私たちは作業を急ぎ、できる限りの水を他の用水路にも供給できるように、日夜努力が続けられています。一〇キロメートル地点から分水路二・五キロメートルを大急ぎで完成、これによって、ブディアライ村下流域の約五〇〇ヘクタール以上、これまでの灌漑面積を加えると、最低一千町歩が直接私たちの水で潤うこととなります。夏の土石流の浚渫しゅんせつもやっと完了、取水口の改修が

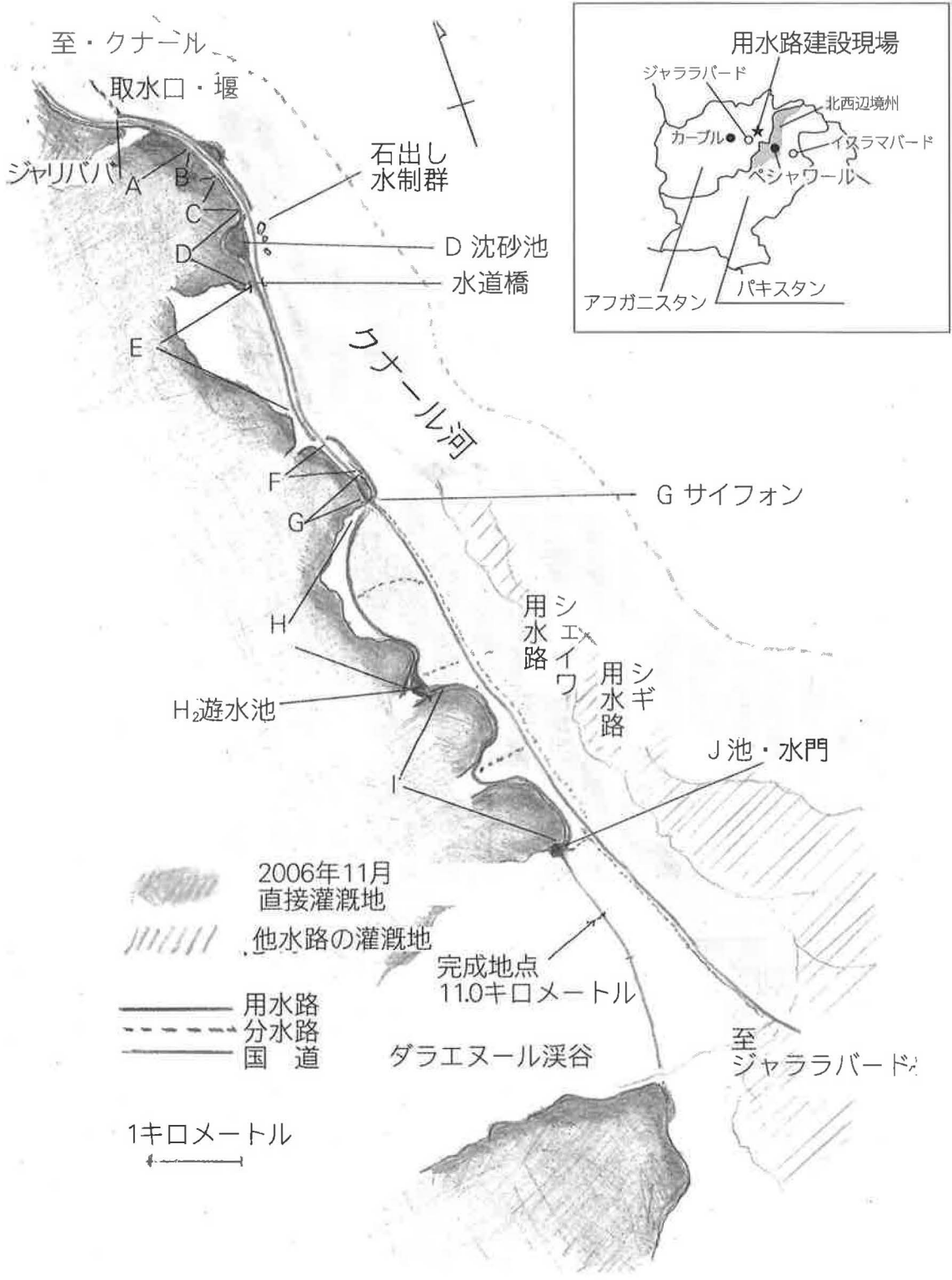


用水路建設の陣頭に立つ中村医師

山場を迎えています。

通水は「生死の分かれ目」

一月二二日、分水路の試験通水が行われ、多少の補修と延長を加えれば、一週間後には送水できる見通しとなりました。取水口では大規模な改修で、少なくとも冬の渇水期は他の用水路に十分量が送水可能となりました。人々の喜び方は尋常ではありません。クナール河の低水位で、多くの農家が絶望的な気持ちに陥っていたからです。これで春の収穫を



灌漑用水路要図 (06年11月現在)

期待して、希望をもって冬を越せます。かれらが、「ありがとう、ありがとう」を連発するのは、決してお世辞ではありません。命拾いに近いものがあるのです。職員や作業員たちも、顔を輝かせ、はつらつと仕事を進めています。

主水路は、現在最も難しいガラエ・ヌール溪谷下流域を横切りつつあります。同溪谷は、途方もない土石流が夏に多発する場所です。今冬に計約三〇〇メートルのサイフォンを完成せねば、最後の三キロメートルを通過できません。一〇月に「突貫工事態勢」を指示、文字通り「やるか、やられるか」の緊迫感の中で必死の作業が進行中です。

私はと言えば、この数週間、マルワリード用水路の取水口に張りつき、ともかく大量の送水を可能にするよう、ない知恵をふりしほり、相変わらず水との戦いを続けています。何十万人分かの小麦収穫が、取水堰にかかっているかと思えば、まさに多くの人々の生死の分かれ目、真剣にならざるを得ません。

#### 民心つかめぬ外国軍

もう三年間以上、川と睨めっこをしていると、不思議なもので、あれだけ格闘した流水に対して、敵愾心よりも親近感を覚えるよう

になります。晩秋の大河は澄み切った空の青を映し、急流の水が真っ白なしぶきを上げ、「まだ性懲りもなく、付き合うのか」と苦笑いしているようにも思えます。堰の長さ二五〇メートル、幅四〇メートル、敷かれた巨石群は壮観ですが、自然にとってはちっけな人の知恵に見えます。白鯨を追うモービー・ディック船長の心境であります。

一方、アフガニスタンの政情は、大きく動き始めました。人々は「外国に擁立された政権は続かない」と信じており、ここ東部アフガンでも、民心は日一日と外国軍に対する敵意があらわになっていくようです。長くPMS（ペシャワール会医療サービス）の水路工事を阻んできた米軍傘下の道路工事会社は、さんざん襲撃に会い、来年一月に引き上げを決定しました。モスクや学校の爆撃で「テロリスト」が掃討できるはずがありません。それに、報道される「タリバン兵」とは、たいていが農民そのものです。四万人の外国兵は、公称一万人の「タリバン兵」と戦っているのではなく、「四万人の外国兵対二千人アフガン農民」と考えた方が正確でしょう。ともあれ、いのちを尊び、愛しむ気持ちに国境はありません。私たちが安全に戦乱の地で働けるのは、このためです。飢えた農民た

ちにとつて、「国際支援」も、「テロ掃討作戦」も、空ろに思えます。上空をけたたましく通過する米軍ヘリが、何だか面白くない茶番劇のように感ぜられます。

対照的に、人々と乾いた大地が緑を取り戻す喜びを分かちつのは、楽しいものです。多くの日本人の善意に感謝し、着実に「緑の大地」計画が進んでいることを伝えたいと思います。良い年をお迎えください。

#### 中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二二年にわたってハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大早魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約九万人（二〇〇五年度）。

## \*ワーカー通信

## 四年ぶりの「挑戦」

灌漑用水路建設担当 蓮岡 修

## ケタ違いの自然が相手

「四年ぶり」ではあったのだが、常にどこかで現地と繋がっていたためか、特別な感慨を抱くこともなく普通に生活を始めることができ三ヶ月が経った。個人的な理由はともかくとして、この土地で再び自然に対する人間の小さな挑戦に関わることになり、この事業自体に余程の根深い宿縁を感じずにはいられない。

さて、「四年ぶり」の事業参加であるが、三ヶ月経った今も以前関わった井戸事業と規模も性質も大きく違うため戸惑いと学びの毎日である。ここでは最も若輩者として二〇代の先輩方から手ほどきを受けて仕事を覚えている。

以前参加した井戸の仕事では、井戸と言う一本一本性格の違う小さな水源を細かく分析し、次の予想を立て全体を動かす難しさがあつた。だが井戸は個々に分かれた水源で、一本が涸れても再掘削したり違う場所で再開できる安心感があり、それに掘れば深度の差はあれ大体の場所で水は確保でき、作業可能地は無数に存在する。その意味で井戸は比較的人間に合わせて作り出せる存在だった。

しかし現在取り組んでいる水路事業では、常に自然の力の大きさと人間の小ささを思い知らされる。現在ユンボ（パワーショベル）一〇台、ローダー（ロードローラー）五台、ローラー三台、大型ダンプ三〇台を使用し、数箇所これらの重機を集中させ作業を行っているが、それでも数時間の雨は悠々と何日間かの作業を一瞬で押し流す。我々の想いと別に、川の水は気まぐれに上下し、それに合わせて重機を移動させフル稼働させなければならぬ。既に大規模な自然のエネルギーと直結している水路現場は、気を許し一箇所の不備を見逃さずだけで全てが使用できなくなってしまう。その為現場は自然に合わせて

作られ、場所はある程度定まっており、何キロメートルにも亘って人の生活に関わる為影響は甚大であり、計画を立てた以上余程のことがなければ引き返しができない。以前から話は聞いていたが実際に現場を見て、毎秒何百トンという川の流れを変えるということ自体人間には恐れ多いことなのではないかと正直に思った。



ブディアライ地域を横切る水路の送水パイプ

## バイパスの地下水路建設も急ピッチ

しかし、この挑戦は、困窮する数十万の農民家族を助けるだけでなく、しばらくの間は早魃が決して回復しないと予想されるこの国の食料を確保する為にも不可欠なもので、現場の状態を見ると、急を要する仕事だと実感せざるを得ない。麦の種まきや水田の水張りが遅れると餓死者が出かねないほど危険な状態で、事業の進捗状態がそのまま農民の実生活左右しているといっても良い。

現在、水路現場では、自然の涸れ川の流れを止めることなく水路を横切らせる為の地下水路（サイフォン構造）建設を急ピッチで進めているが、この大規模な工事雨も雨が降れば流れる自然の川の流れを続けさせるものである。何気ない自然の秩序に逆らわないために費やす人間の膨大なエネルギーをみると、自然に対しての畏怖と人為の限界を感じずにはいられない。

何もかも新鮮な現場で開始した再参加である。現在の組織で冷静にやれること考え、謙虚に自然に沿った仕事を続けて行くだけである。その道程から得られる想いを次の機会に述べられたらと思う。

## 子供たちの笑顔に 難工事完遂を決意

灌漑用水路建設担当 木藪健児

### 最難関の農地用分水路を担当

ペシャワール会に関わっておられます皆様方、初めまして。水路現場の新参者で木藪と申します。ペシャワール会の活動の熱にあてられ、現地に参加した次第です。

この地に着いてより六ヶ月あまり。仕事上の言葉もいくらか憶え、シャルワール・カミーズもそろそろ板についたかなと、一人ほくそえむこの頃です。

素人ながら、水路の所々に必要なコンクリート建造物の製作を担当しております。現在、主水路は、ドラエ・ヌール渓谷下流のブディアライ横断という難関に挑んでおりますが、これより一足先に、さらに下流の農家の点にする地区に農地用の分水路を通してしまおうという計画があり、これを担っております。この分水路は、これを通せば主水路完成を待



今年7月の土石流による土砂を取り除く現地作業員（右下は復旧後の水路）

たずして、この地域の来年の収穫が可能になるといってわけ、建設を急いでおります。

この地域は、いわば長大な谷の出口といった所にあります。時として、急な雪解けと豪雨による鉄砲水に襲われるという、物騒で厄介な土地でして、この低地での造作に日々を費やしております。見張り番テントは流される、設計変更は言い渡される、小麦の種



用水路（手前）によって復活した耕地

まきは迫る、おまけに道路も流されるという状況に、さすがに何度か泣きたくなりました。しかし、埃まみれの遅いとしか云い様がない現地作業仲間と共に、それでもがむしやらに土石を掘り返しておりますと、なんとか間に合わせねばと、その度にふつつつと湧き上がってくるものがありました。

いろいろと問題は山積みでしたが、資本主

義というシステムの中での勤めであれば、嫌気のさすところだったと思います。ですが、人の生活や時として命をも軽んじる者のより多くの利益の為にはなく、ご都合主義の国際社会の犠牲ともいえる、悲惨な状況でしかし屈託なく笑う子供等の、明日の心配を取り除く為だと思つと、涸れ川め今に見てると、俄然気持が入ってまいりました。

### ひろがる緑の大地

嬉しいことに、自分が関わったこの数ヶ月の間にも緑化された土地が目に見えて増えてきております。干ばつが起こり、そのうえに空爆を受け枯葉剤まで撒かれたというこの土地がです。旧いアメリカ先住民の言葉に「白人はゆく先々ですべてを汚す」というものがあるそうです。ミサイルを掲げて正義を名乗る、臆病を勇ましさにみせかけた、特にアメリカにおいてはそれから脱却しているところはないようです。「報復戦争」当時、なんてまねしやがるとニュースを見ていましたが（日本も補給艦なんて出してるから泣けてくる）、水が来たと単純に喜ぶ作業仲間や住民達を見てると、こちらも少し救われたような気がします。食と水の心配がなくなるということが、どれほど人心に安心をもたらすかと

いうことを、彼等の顔を見ながら考えずにおれません。この土地において、自ら収穫できるといふことは、ごく基本的でありながら、最大級の喜びであるように感じます。そしてここの子供等が空腹に泣かずに済むようにということが、ここでの暮らしの原動力というか、支えのように感じます。ただ、将来この子らも、自分の作業仲間よろしく、遅しいひげづらになるのかなと思つと、すこし寂しさを伴いつつも、笑えます。

そして、このアフガニスタンという国についてですが、いくらか旅慣れた者としての、その視点からの印象を述べますと、他より突出して貧しい国だとは思いません。ただし、この上なく痛めつけられ、未だ危険といわれる状況の中で、少なくとも農村での最低限の物資確保には、ただならぬ努力が必要であろうと想像するのですが、どういふ訳か、年寄り、子供がそれでも屈託なく、表情豊かに暮らしているという事実には、時々困惑を隠し得ません。今のところ、一応金銭的には豊かといわれる日本にいつの日か持ち帰りたいと思つものです。

まだまだ若輩者ではありますが、皆さんの気持とともに一生懸命頑張ります。これからどうぞ宜しくお願い致します。

## 充実感と無力感のはざままで

ドラエヌール診療所勤務

竹内英允

### 「習うより慣れろ」で現地語習得

ペシャワール会のワーカーとしてアフガニスタンに足を踏み入れ半年が経ちました。マストド將軍に憧れてした無謀な旅より二年ぶりのカイバル峠、新しい事への期待や不安より、むしろ戻ってきたという懐かしい想いが強かったように思います。

現在私は前任者の紺野さんを引き継いでドラエヌール診療所にて勤務をしています。ペシャワール会は運河作りのイメージが強かったため、診療所勤務を告げられた時は少々意外な感じでしたが、飯炊き係や雑用などなんでもやる覚悟で来ましたので、ペシャワール会の原点である医療に携われる事に嬉しく思っています。とはいえ医療に携わる事を夢にも思っていないく不安を感じながらも「習うよりも慣れろ」ということで、日本を経つ

て一週間後にはすでにパシトゥウ語で受付をしていました（勿論紺野さんが横に付き添ってくれていました）。その後半年が経ち、少しずつではありますが薬を覚えたり、日本から看護の本を取り寄せたりして医療について勉強しています。初めはパシトゥウ語もたじたじで殺気立った患者さんに圧倒されればなしたじで受付も今では患者に「久しぶりじゃないか。どうしてんだ？ 最近患者として来なかったので死んじゃったのかと心配していたんだよ」などと冗談をいいながら日々接しています。

### 「ホツチキス止めは医師の仕事じゃない」

紺野さんがドラエヌールを離れて四ヶ月。紺野さん本人は以前の会報に「自分が残せた物がないように思う」と書かれていましたが、居なくなったらその人の大切さがわかるもので（居なくなる前からわかっていました）長年紺野さんや先代ワーカーが築いてきたものが土台となって頼りない私でもなんとか支えています。

日本人は立場上管理者として滞在しているのですが、他の社会でも同じように外国人が突然来て強引に新しい事を始めようとすると反発が起こります。「自分の考えを押し付け



ドラエヌール診療所

るのではなく、一緒に問題に取り組んで行く」と言葉では簡単に言えますが、実際にやってみるとなかなか上手くいかないことが多いのです。特にアフガニスタンやパキスタンではインドのカースト制度の名残（？）からか階級社会であるため、日本から来たばかりの

私には理解し難いこともしばしばあります。

こんな事がありました。ドクターに書類をホッチキスで止めて欲しいとお願いしたところ、「自分の仕事じゃない」と断られてしまし、  
「自分の仕事じゃない」と断られてしまし、  
い険悪な雰囲気になったことがありました。  
なんて自分勝手なドクターだろうと藤田さんに相談した所「ホッチキス止めはドクターの仕事じゃないから」と言葉を先回りされ、自分は何もわかってなかったんだと思ひ知らされたものです。

山岳地帯に位置するグラエヌール診療所は地域一帯で唯一、二四時間急患を受け入れている診療所でもあります。その為夜中に急患で叩き起こされることもしばしば。しかし、ドクターに診察・処置をしてもらいホッと安心する患者さんを見たり、帰り際に感謝の言葉をかけてもらえると自分も何か人の役に立っているように救われた気分になります。しかし、診療所で全て対応できるわけではなく、診療所で処置できない場合はジャララバードの街まで行ってもらうしか無い場合もあります。時折、本当に何も出来なかったのだからかと考え込むのですが、結局医師ではない私にはわからないんだと無力感を感じる事もあります。

最近アフガニスタン全域に於いて治安は悪化

を辿る一方ですが、以前中村先生がおっしゃっていたように、身を守る最大の武器は銃ではなく住民からの信頼だと信じています。多少慣れたとはいっても解らない事はまだまだ多く戸惑う事も多いですが、一緒にグラエヌールに滞在する兄のような存在の伊藤さんと進藤さんに支えられながらもアフガニスタンの平和を願い活動を続けていきたいと思ひます。

#### ▼郵送方法の変更について▼

\*一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

#### ▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

\*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

#### ▼未使用の切手、ハガキを！

\*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

\*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

## アリアナ大地

### 翻訳

甲斐大策

5

電と陽射しが交互にやってくるカラコラム山中を往く。天を傾けたような大斜面の下方、径八〇メートルほどの池を迂回したジープは、小高い丘へ上る。土地の青年が池を指さした。

「あそこには大昔、アジュダハルが棲んでいた。村娘に思慕するので、アアリーが退治した。その村は二〇世紀初め、山崩れに吞まれて……。」

五〇〇人近い村人たちが埋ったままだという丘の頂きから、行く手に氷河が見え、虹がかかっていた。

アジュダハル伝説は、バーミヤーン西方バンディ・アミール湖をはじめアフガニスタン各地、苛烈な自然と極度の貧困の中に生きる、シアーを奉じる人々が伝える。

アジュダハルを、Persian-English 辞書に見れば、Dragon とある。私たちは、ひと呼吸もせず即、竜の意と納得し、翻訳完成を疑わない。

異民族、異文化の出合いには「翻訳」が不可欠である。しかし、無謬の翻訳はあり得ない。誤謬少ない最大公約数的訳語、訳文を用意するしかない。Peace, Freedom, Society, Love にそれぞれ平和、自由、社会、愛の字をあてた明治人の苦勞など考えもしない。二千年余り外来の、国のシステムから文化・技術・思想・倫理までも翻訳を当然として育ってきた日本列島の住人だからである。しかし世界は変化する。翻訳の鵜呑みは、ある民族や国家の理解を誤り皮相な認識にしかならない。

アジュダハル、Dragon、竜は、同じなのか。何が似て何が非なるものなのか……。聖者アアリーと弘法大師様が異なるように、アジュダハルと竜が異なる存在なのは確かである。

## サツマイモとお茶の 加工法を研究しています

農業計画担当 伊藤和也

### 種イモの越冬に初成功

皆様いかがお過ごしでしょうか。こちらは気温も下がり始め風物詩であるラクダの群れが見られます。

さて自分が毎日仕事を開始するに当たって最初に行うことは「ニワトリ」達に餌付けすることから始まることが多くなりました。ニワトリといっても本物のニワトリではなく子供たちのことです。なぜニワトリかという点、最近子供達が、お茶菓子としても行っているチョコレート（日本で言うキャラメルやハイチュウ、こちらでは軟らかい餡のようなもの全てチョコレートという）を目当てに多いときは一〇人ほどが集まってきました。そして口々に「チョコレート、ラーカ（チョコレート頂戴）」といい、「二個渡しても、もっと頂戴と来ます。その様子を見たファー

マーのアキルシャーが、

「こいつらはニワトリと一緒にだ」

「ニワトリ？」と聞き返すと

「ニワトリは餌をやっても食べたのを忘れて次から次に餌をほしがる。こいつらもそれと同じだ」

「なるほど。確かに同じだ」と納得したことから、以来、ニワトリの子供達、餌をやるチョコレートをあげるといのはファーマーのアキルシャーとのやり取りで使われるようになりました。

そのおかげ（？）で朝からにぎやかです。たまに集まってこないときは何だか物足りないような感じがするようになりました。

そんなにぎやかな中仕事をしていきますが、今年もサツマイモの収穫が先日終わりました。今年栽培した甘藷は昨年栽培、収穫し種芋用として保存したサツマイモを高橋さんの指導の下、越冬に初めて成功し、日本より種芋を送ってもらう必要がなく栽培、収穫することが出来ました。収穫したサツマイモは、こちらでは一般的な食べ方であるという丸のまま茹でる食べ方の他、細かく切って油で揚げるチップスを作り近隣の人達とで食べたところ、非常に好評でした。子供達が貰いにきたので配った分と併せてあつという間に収穫したサ



試験農場の近隣の子供たち

ツマイモがなくなりました。今年は栽培面積が小さく収量が少なかったため来年は栽培面積を増やしサツマイモがたくさん取れるよう、今行っている芋の保存からファーマーとともにトライしていきたいと思えます。

### 茶葉の色にもお国柄

今同じ農業担当である進藤さん、カライシ

ヤヒ担当のフアーマーのモハマドアジャンとともにやっているのがお茶の作り方、淹れ方です。皆様をご存知の通りPMS農場ではお茶を栽培していますが、秋に剪定を行い、その作業の時にでる葉っぱを使ってお茶作りも三年目になりました。今年はアフガンの人達がおいしいといってお茶作りを目指し、飲んでもらいながら作り方を勉強しています。

昨年までは葉っぱを蒸す、揉む、天日で乾燥、煎る、軽く煮出すといった方法で作っていたのですが、このやり方だと日本人（自分や進藤さん）がおいしいと思ってもアフガン人には渋すぎる、苦すぎる、色が悪い（煎るため色が茶色になるのですが茶色になるのがダメと言われました）とうまさの基準そのものが違うため苦戦しています。また人によっては日本人が作ったというだけでおいしいという人がいるため人選びも難しいところです。そのため素直な意見をいうモハマドアジャン、ドラエヌールで調理を担当しているダワジャンの二人に飲んでもらいながら、こうした方が良い、これではダメだと意見を聞きながら作っています。最近はだんだんと良いほうに近づいていますので、近々自分たちが作ったお茶でアフガン人においしいといってもらえる

のではないかと思います。

最後に今年は一二月二日にドラエヌールから望む山に初雪が降りました。昨年と同じ時期の雪ですが、昨年は本来降るべき時期で

### 自分を犠牲にしても助け合う スタッフの姿に感動

PMS本院薬局事務 河本定子

#### 庭師も薬局の雑務を応援

ベシヤワールPMS病院敷地内では、庭師の手入れが行き届いているため、バラの花が、一年間のうち何度も咲きます。季節によって花の大きさや色形、鮮やかさは異なりますが、患者さんそして私たち病院スタッフの心をいつも和ませてくれます。

毎朝、八時の「カーンカーン」と鳴り響く鐘の音で、そのバラの咲く中庭に全スタッフが集まり、朝礼に参加して一日がスタートします。いつも、気持ち良いスタートが切れるのも庭師のお陰と思っています。

ある冬に雨、雪が少なく、近くの農家では小麦が上手く育たなかったところがあります。文字通り「命の水」の源がある山に今年は多くの雪が積もることを祈る気持ちです。

薬局では、数ヶ月前より午後から受付のヌールハーンに加え、庭師のイクラムも雑用業務を担当してくれています。彼ら助っ人のお陰で、薬局の仕事はずいぶん助かっています。このように、自分の業務以外の仕事をすることは、PMS病院では、よくあることです。様々なポジションで多くのスタッフが、いくつかの仕事をかけもち協力し合っています。

ある日 検査室の検査技師の奥さんが、重い病で、出血が止まらず、A型の血液を献血してくれる人を探していました。これを聞いたA型の男性日本人ワーカーは、二つ返事で、すぐに献血をしてあげていました。つい最近、私を含め日本人ワーカー三人がA型であることが判り、「もしA型の血液が必要なときは三人とも協力できるね」と話していたばかりでした。

その輸血を必要とする検査技師の奥さんは、既に七四〇〇mlも輸血されているにも関わらず、まだ献血してくれる人をさがしていません。私たち女性ワーカーも協力を申し出まし



PMS本院に入院中の患者さん

も献血に応じる」と検査技師に伝えていました。早速、献血要項に当てはまるため、採血することにになったのですが、残念ながら前回の献血した時期から日数が短すぎることでドクターストップがかり、中止になりました。

#### ドクターストップをおして献血

だが、男性で若く、体力がある人を探しており、残念ながら対象外になりました。そこで、私と一緒に働いている薬局のメンバーに血液型を聞くと、アシユック（スタッフに愛称で呼んで欲しいとロメール本人の要望でここでも愛称にしました。意味は「loveです」とヌールハーンがA型だとわかりました。更に必要なら献血する、とほとんど皆の答えがかえってきて、心が熱くなりました。

中でも、アシユックはつい二ヶ月前にバスから落ちた人にも献血をしており、名前（愛称）通りの人でした。そして、検査技師の奥さんと同じA型なので「必要とあればいつで

その後検査技師が、欠勤で奥さんの病状もわからなかったのですが、数日後、彼から薬局に一本の電話がかかってきました。その内容は、「やはりアシユックの献血が必要」というものでした。アシユックは、ドクターストップがかかっているにも関わらず、献血することに同意しました。採血のときに、アシユックが検査技師に聞いたところによると、奥さんは、「一度目の赤ちゃんを流産して、今回二度目の妊娠で、出血が止まらず、明後日に手術をすることになった」と泣きながら、

言っていたそうです。病状は現在わかりませんが、何とか母子ともに助かってほしいと願うばかりです。アシユックが採血をした次の日には、皆が声をかけたりして体調を気づかっているようすがうかがえました。今回の事で「自分を犠牲にしても、人を助ける姿」を教えられました。又「支えることは、支えられること」で自然に病院の中で起こっていると同時に日頃から養われていると感じました。今、こうしてこのメンバーと仕事できて本当に良かった、と心から思っています。また、ワーカーとして一年経ちました。私もこのメンバーの一人としてこれからは、薬局の仕事だけでなく、より病院の仕事に貢献していければと思っています。

いつも、日本から応援して下さいている皆様そして会員の皆様に感謝いたします。

#### ▼郵便払込票の記入は 分かりやすく▼

\*ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

## ●ワーカーOB近況報告②

# 実践と継続の大切さを学んだ日々

元・水源確保事業担当ワーカー 目黒 丞

日本からご支援くださっている皆様、いかがお過ごしでしょうか。と、この書き出しで原稿を書くのは三年ぶり以上になります。

以前、水源確保事業に従事していた目黒丞と申します。早いもので帰国して三年が過ぎ、今では二児の父親となっております。東京で会社員をしており、恥ずかしい話ですがあの頃よりはお腹が出てきました。

現地へ渡る前は何をやっても納得ができません、長続きもせず、両親の心配を振り切ってペシヤワールへ渡るといふ親不孝者でした。深い考えもないまま現地に着き、日本では気づく事さえできなかった状況を知り、反省してからはできる事を必死でやり続けた二年八ヶ月でした。

へたくそな英語だけを頼りにダラエヌールへ派遣され、必死でパシユトウ語を覚え、着任後約一年の九月にあのテロが起き、井戸掘りを中断してパキスタン側へ撤退させられ、

「爆弾の雨よりも食料を降らせろ！」という中村先生の言葉で、食糧配給事業を必死で行い、新政権ができてからも混乱の中で井戸掘りを進め……と夢中でした。立派な人間になって帰国したと言えるほど大きな成長はしていないのが恥ずかしい限りです。

帰国してからの三年間、いろいろな事が起きました。私自身の生活もそうですが、世界も動き続けております。

イラク戦争、中東の紛争、北朝鮮の核実験、まだまだ日本にいると耳に入らないだけで多くの紛争が起きているかと思えます。

日本ではほとんど報道されなかったと思いますが米軍はアフガンで多くの失敗をしています。イラク戦争の際に表面化し大きな問題となった捕虜虐待事件がありますが、似たような事はアフガンでも起きていました。

戦争は狂気です。人が人を殺す事に大義を持たせてしまいます。止められるのであれば

止めたいと願っても私一人の願いで世界は変わらないでしょう。しかし、願っている事を背けない事、小さくてもできる事を続ければ、少しずつ変わっていくかとも思います。

私が水源確保事業に赴任した二〇〇〇年一月は先任の連岡君が一人でジャララバードオフィスを切り盛りしていました。掘っている井戸は百数十本ほど。他国のNGOや国連組織に比べてとても小さな規模でした。

日本ではアフガンが早魃になってくる事すらほとんど知られていませんでした。早魃の規模とアフガンを取り巻く情勢から「どこまでできるのだろうか」「いつまで続けられるのだろうか」と常に不安と無力感を感じていました。それでも中村先生の指揮の下、あきらめずに自分たちのできる事を本当に待っている人たちのためにやり続けた結果、現在では一五〇〇ヘクタールの灌漑を成功しています。

できる事をやり続ける、それが一番正しい事だと思えます。今、こうしている間にも現地ではコツコツと日々の作業が続けられている事でしょう。その積み重ねがまたひとつ、もうひとつ、とより多くの笑顔を生み出す事になるかと思えます。

変わらぬ気持ちを守れるものがあります。これからも変わらぬご支援をお願いいたします。

●『丸腰のボランティア』を読んで

## 「ダ N G O カール デイ

(これこそが N G O の仕事だ)

ペシャワール会会員・料理教室主宰 米原ユリ

五年前、中村哲さんを知り、何てすごい日本人がいるんだ、と驚き、ペシャワール会に入会しました。それから、すごい！と感心するばかりで、なぜこんな大きな事ができてしまうんだろう、ということはあまり考えないできました。

四六人のワーカーたちによる、一九八八年からの現地報告を年代順に集めた、この『丸腰のボランティア』を読み、日々の作業のつみ重ねを具体的に知ること、なぜハンセン病中心の医療活動から井戸掘り、農地再生、水路建設へと展開していったのか、なぜそれができたのか、少しつかめたように思います。哲さんの発想のすごいことにはわかりませんが。

現地では、ペシャワールの病院での診療やいくつかの診療所での医療活動の他に、山の無医地帯に定期的に出かける訪問診療を行な

います。医薬品、道具、食品をギユウギユウにつめこんで、車で行ける所まで行き、そこから先は馬を使って進みます。目的地まで一泊や二泊かかることもあります。数日間の滞在の間、村人や奥地から訪ねてくる人たちを診察し、ハンセン病の調査を行ないます。結核、心臓疾患、リウマチ、腰痛などなど、たくさんの病気があり、ハンセン病患者のおかえれている状況も厳しい。定期的に訪問することの大切さをひしひしと感じる旅の帰り道のことを藤田千代子さんが書いています。

「ラシウトでの診察を終えてマストツジへ帰るとき、山の中腹にある、幅五〇センチくらいの山道を行きながら馬の上から―中略―四五度勾配（私にはそう思えた）の上りや下りの道を恐しさに汗ビツシヨリになりながら行くと、診察中に感じたことなど全て忘れてしまつて、どうしてラシウトなのか、どうしてこ

んな医療も受けられない辺鄙なところに住むのか、と腹が立ってきました―中略―

以前、中村先生が講演で『行きやすいところは誰でも行けるし、行つてくれる。私たちは本当に必要とされているところへ行こう』と話され、本当にそうなんだ、と感動した覚えがあります。でも、それを実行するとき、ちよつと難しいことになったり、恐ろしかったりすると、すぐ、『どうして？どうして？』と考えたり、住んでいる人に腹を立てたりして、なかなか……」（一九九六・一二）

ひとりひとりのワーカーたちがぶつかる厳しい現実、その中で働き、悩み、のりこえてゆく様子が各々の報告から伝わってきます。

山に出かけると、人のスカウトもしてきます。地元の若い青年や娘さんを見つけ、ペシャワールにつれてゆき、医療スタッフとしてトレーニングする。いずれ地元に戻って働いてもらおう、という計画です。その若者たちが、本のあとの方のページにもできます。ヤールマステイン、ヌールベীগム、アブドウラの名をみつけ、成長ぶりを知ると、読んでいるこちらまでうれしくなつてきます。

こうして手塩にかけて育てたスタッフが次々と辞めて行く事態がおきます。アフガニスタン人がカーブルに帰るためであったり、

他の外国援助団体や国連プロジェクトが高給を出すためです。そういう時も、「ここで訓練したことがアフガニスタンで生かされている」と考えるようにしたり、「表面の事態がどんなに変わっても、変わらないものは変わらない」ということを慰めにして、日々の作業を続けます。

長い年月にわたる、このようなつみ重ねがあったから、ドラエヌールで井戸を掘る目黒丞さんは村の長老に、「私達は一〇年以上もあなた達日本人の活動を見てきました。だから私達は知っています。あなた達は絶対に逃げない」と言われるのです。(二〇〇一年一〇月)

中村哲医師と医療スタッフが培ってきた信頼があったから、井戸掘りを進めることができた。住民が自分達で管理できる技術と道具を使った井戸掘りをしてきたから農業や十万人の命を救う水路建設へとすすむことができたのです。

ペシャワール会とは正反対の、相手の必要とすることではなく、自分の側の論理や倫理、情熱を押しつけようとする諸団体の様子もたびたび書かれています。支援という美名で大量のお金が投入され、現地社会に逆に混乱をもたらしています。(医療スタッフの引き抜

きもそのひとつ)

「有名な国際組織だから大丈夫」、「善いことだから、まあいいんじゃない」と気軽に考えず、たとえわずかなお金でも、その使われ方にしっかりと関心をもつこと。お金を払う側のお金の行方に対する責任を痛感します。

本書を読んでいる間、あまりに苛酷な貧困

に涙を流し、ワーカーたちの失敗談に笑い、祭りや食習慣など当地の文化を知り、風景の美しさ、果物のおいしさにあこがれ(マンゴージュースはどうしても飲みたい!)、とても豊かな時間をすごすことができました。「ボランティア」の真の意味をはじめて知ることのできた一冊です。

ペシャワール会2007年カレンダー

# 「大地の家族達」

画・甲斐大策

**同封ハガキで申込受付中**

1500円(税・送料込) / A2判オールカラー

\* 2007年版カレンダーが完成しました。本年も、毎号の表紙絵を飾る甲斐大策氏の作です。本年のテーマは「家族」です。ふるってご注文下さい。

(すでにご注文下さった方への発送は順次行っております)



●事務局便り

\*アメリカの中間選挙で共和党が敗北し、ラムズフェルド国防長官が更迭された。イラク戦争は間違っていたという民意の反映だという。では、と時間を巻き戻して考えてみたい。二〇〇一年に起きた九・一一テロへの報復として、アメリカ合衆国は、その年の十月からアフガニスタンの空爆を開始し、二〇〇三年の三月からはイラク侵攻をはじめた。開戦の理由は、タリバン政府がアルカイダを匿ったということであり、フセイン政府が大量破壊兵器を保持し、さらにアルカイダと連携してテロを企図しているということであった。この政策を大半のアメリカ人（民意）は支持した。ところがイラクにおいてはその大義は過ちであった上に、苦し紛れのイラク民主化策も内戦状態の前では、虚しく否定された。アフガンの場合は、選挙が行われたというところで、国際社会は一定の評価をしているように見える。

※さて、日本のアフガンへの関わりは大きく二つある。一つは平和プロセスで、行政経費支援、治安改善、インフラ整備等の分野で、一千億円以上が投入されている。もう一つは戦争プロセスで、自衛隊による米軍の後方支援（インド洋での給油活動）で、これはODAの額より桁違いに大きいという。

十月、東京外大で開かれたシンポジウムに参加し、興味深い報告を聞いた。外務省アフガニスタン支援調整特命全権大使に前JICAアフガニスタン事務所長、

丸腰のボランティア

中村哲・編  
ベシヤワール会日本人ワーカー・著  
すべて現場から学んだ診療所をつくり、井戸を掘り、用水路を建設する――。現地日本人ワーカー47名による活動報告集 【新刊】1890円

空爆と「復興」 【2刷】1890円

辺境で診る 【3刷】1890円

辺境から見る

ダラエヌールへの道 【3刷】2100円

医者 井戸を掘る 1890円 【10刷】

医は国境を越えて 2100円 【6刷】

ベシヤワールにて 1890円 【8刷】

聖愚者 甲斐大策の物語  
「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

アフガニスタンの診療所から 609円  
筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

価格はすべて税込価格(税5%)です

日本政府の特別代表としてDDR（武装解除・動員解除・復員事業）を担当した現外大教授にベシヤワール会事務局員というメンバーだった。中でもDDR担当者レポートは、アフガンの情勢はイラクと同様に深刻でいつ急激な悪化を辿るか分からない、と前置きした上で報告であった。DDRというのは、具体的にはアフガンの旧軍（軍閥の軍事組織）の解体作業で日本がそれを担い概ね成功したという。それは「武装した軍閥たちの存在は治安への脅威ではあるけれども、外敵に対しては抑止力になっている」という中で、ジレンマを伴う作業である。これは同時に新国軍の創設（米国担当）と新警察の創設（独国担当）さらに司法制度の完備を要請される事業で、それがなければ「一方の空白」を生みバランスを危うく進行しないために、ネオタリバンと称されるグループの反攻が活発化している。さらに問題は、ブッシュ政権がアフガンでの選挙を成功させ大統領選への「成果」とするために、軍閥の一部を二、三週間トレーニングし即席の警察官五万人をつくってしまったことにある。英国の将校の語ったところによると、タリバンによると称された攻撃の一部は、ケシ栽培の権益を持つマフィア化した軍閥とそれとつながる地元警察ではないか、ということである。アフガンの治安悪化の原因が早魃という天災だけではなく、厄介な人災に拠ることも忘れてはならない。

会 則

- ① 本会の名称をベシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。役員は改選は毎年総会にて行う。会の運営について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAHOUSE（〒八〇一〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇一三五 上村第二ビル六〇三号 TEL七三二一三三七二）内におく。